

車椅子から「特権」を考える

大橋理枝¹⁾

Pondering on privileges from a wheelchair

Rie Ohashi

要旨

「特権」とは「ある社会集団に属していることで労なくして得る優位性」である（出口、2020）。本稿では筆者がどのような特権を有しているかについて、自身が2か月弱程度車椅子使用者となった経験から考察し、「社会関係資本」「経済資本」「人的資本」「社会資本」の考え方を援用して整理した上で、筆者が車椅子を使うことができたのはこれらの資本を併せ持っていたからこそ可能であったことを示した。支援を行う義務がないにも拘わらず支援を申し出してくれる周りの人たちがいることは「社会関係資本」であり、車椅子やタクシーをはじめとする出費を伴う対象を躊躇なく利用することができるのは「経済資本」を有しているからであったが、これらはどちらも放送大学の教員であることによって裏付けられていることが示された。加えて、支援を申し出してくれる人たちに対して援助を求めることができるのは筆者が有している「人的資本」によって可能となっていることが分かった。そして、車椅子を使って電車で移動することができたのは日本社会の中にそれを可能にする「社会資本」が存在するためであった。これらの「社会関係資本」「経済資本」「人的資本」を有していることはそれ自体が特権であり、要支援者のために整えられている「社会資本」は、それを使わなくて済むことこそが特権であることが確認された。更に、自分に関することを自分に向かって話してもらえということさえもが特権であるということに気付くことができた。誰もがマジョリティ性とマイノリティ性を併せ持つ中で、普段は見えないこれらの特権を注視する努力を続けることは重要である。

ABSTRACT

Privilege can be defined as “the advantage obtained without effort by belonging to a certain social group” (Deguchi, 2020). This paper examines the author’s privileges through her experience of being wheelchair-ridden for 2 months, revolving the discussion around the concepts of “social capital”, “financial capital”, “human capital” and “social overhead capital”. It was revealed that the author’s social, financial, and human capitals had enabled her to carry on with her life without much hindrance while she was on her wheelchair, and owning these capitals was a privilege. It was also found that not having to utilize the social overhead capital for wheelchair users was a privilege, and that even being spoken to directly was a privilege in and of itself. As we all can be in a minority position at one point in time, it is important to continue keeping an eye on one’s hidden privileges.

¹⁾ 放送大学教授（「人間と文化」コース）

1. はじめに

筆者は今住んでいるところに住み始めて10年以上経つ。従って自宅から放送大学まで行くには幾つかの経路があることを知っているし、それぞれの経路でどの駅でどの電車に乗り換えれば良いかは熟知している。また、目的地が放送大学でない場合でも、路線検索アプリという便利なものがあるお陰で、どこかに行こうとする度にどの経路で行けば最も早く着けるかはかなり正確に予測できるし、日本の公共交通機関の精度のお陰でこの予測はほぼ当たる。そして普段はその予測通りに目的地に着くことに対して疑問を持たない上、そのことを自分が当たり前だと思っていることすら自覚しない。

ところが筆者は2023年6月7日の朝に自宅で脚を骨折し、その後2か月ほどの期間に亘って外出時には主に車椅子を使って生活するという経験をした。

車椅子を使うことに慣れていないために生じた戸惑いもあった（例えば電車の中ではどの向きに車椅子を向ければ良いのか？車椅子優先スペースでない位置で乗った時にはどの位置にいるのが最も邪魔にならないのか？などは誰も教えてくれなかったし、急に止まってしまって後ろから来た人を驚かせてしまったりもした）。また、普段より低い目線で回りを見ることになったが故にそれまで当たり前に見えていたものが見えず、逆にそれまで目に留めなかったものが見えたりもした。が、この期間中筆者が特に気を付けていたことは、移動に掛かる時間が増加することを予想して通常より早く出発するようにすることだった。それでも何度か遅刻してしまったのだが、その度に車椅子でなければ遅刻しなかったであろうと感じたものだった。

一方、骨折してから治るまでの2か月程度の間に予定していた活動の中で筆者が予定変更を余儀なくされたものは、筆者が定期的に手伝いに行っていた先にこの期間一度も行けなかったということ以外、驚くべきことにほとんどなかった。骨折した翌日にあった2日目の面接授業からはじまり、毎週の非常勤先への出勤、収録や会議のための放送大学本部への出勤、新幹線に乗って行かなければならなかった面接授業や学会、そして毎週の趣味の集まりとその発表会—私はこれら全ての予定を変更せず、当初のスケジュールのまま活動した（実際に変更した予定は友人との飲み会を一つキャンセルしただけだったと記憶している）。予定を変更せずに済んだのには多くの理由があることは言うまでもなく、その中には偶然に依るものもある（筆者が骨折したのが脚でなく腕だったら、趣味の集まりやその発表会に参加することはできなかつたはずだし、その他の仕事を行う上での支障も甚大だったはずである—台本の原稿が打てなくて収録に支障をきたすなど）。しかし、結果的に活動予定を変更せずに済んだ

のは、筆者が様々な資本や資源を有しており、それらを活用することができたことが理由であることも間違いない。

出口（2020）は「地下鉄の駅で、車椅子の人やベビーカーを押している人を見かけたとき」に『「車椅子やベビーカーの人は大変だなあ』と思うだけでなく、『私には最寄りの地下鉄の出入り口を利用することができる特権がある』や『私には地下鉄や電車を利用する前に、エレベーターかエスカレーターがあるかどうか調べなくて済む特権がある』というように、『〇〇という特権がある』と自動的に受ける具体的な恩恵に置き換えること」を説いている。従って本稿でもこれに倣い、移動に車椅子を使うという経験から得られた気づきを「特権」という観点から考えてみたい。次節で「特権」について概念を整理した上で、筆者が予定を変更せずに済む理由となった資本や資源について、次々節以降で考察していく。

2. 「特権」とは

出口（2020）¹は「特権」（privilege）を「ある社会集団に属していることで労なくして得る優位性」と定義し、「ポイントは『労なくして得る』で、努力の成果ではなく、たまたま生まれた社会集団に属することで、自動的に受けられる恩恵のことである」と述べている。そしてその特徴として「特権は持っている側が自分の持っている特権になかなか気づけない」（出口、2021、p.74）という点を挙げる。例えば大学進学を考えると、本人の頑張りで志望校に合格しただけではなく、勉強に集中できる環境や、学校及び塾や予備校の指導、そしてそのような教育機関に通えるような親の経済的基盤など、本人の努力以外の要素もあるはずである（出口、2020；2021）。このような環境を得られることこそが特権であるにも拘わらず、それを享受している者は自分が特権を持った立場にいることに気付かないのだ。

このことについて、出口（2020）は更に分かり易い例えで説明している。

特権とは、ゴールに向かって歩き進むと次々と自動ドアがスーッと開いてくれるもの、と考えればわかりやすい。自動ドアは、人がその前に立つとセンサーが検知して開くが、社会ではマジョリティに対してドアが開きやすいしくみになっており、マイノリティに対しては自動ドアが開かないことも多い。マイノリティはドアが開かずに立ちほだかるため、ドアの存在を認識できるし、実際認識している。

しかし、マジョリティ側はあまりにも自然に常に自動ドアが開いてくれるので、自動ドアの存在すら見えなくなってしまう。特権をたくさんもっていても、その存在に気づきにくいいため、マジョリティ側

¹ この文献はウェブサイト上にあるため、引用箇所については引用元ページ記載不能。

は自分に特権があるとは思っておらず、こうした状況が「当たり前」「ふつう」だと思って生きているのである。

この例えの中で言及されている「マジョリティ」と「マイノリティ」について、河合（2010）は次のように述べている。

日本語の一般的な用法では、マイノリティは、単に「少数者」という意味だけでなく、「差別されている側」そして「弱者」を広く含めた概念である。マイノリティという概念には、権力関係で劣位に置かれている、という意味が含まれる。逆にマジョリティとは権力関係で優勢な立場にあり、「差別する側」そして「強者」という存在といえることができる。（p.162）

この指摘を踏まえると、「特権」という「自動ドア」は社会的強者に対しては常に自然に開くものであるが故に気付きにくいものであるのに対し、社会的弱者に対しては開かずに立ちはだかるため当人には常に認識されるものであるといえる。

車椅子使用者は数的に少ないという意味ではマイノリティに属する。即ち、社会の中で「自動ドア」が開かない、若しくは開きにくい立場にあるといえる。それでも筆者が車椅子使用者になる前に立てていた予定の殆どを変更せず済んだのは、筆者がどのような資本・資源を有していたからだったのか。次節以降では幾つかの資本・資源の類型を援用しつつ、筆者に見えた「自動ドア」について考察する。

3. 開いている「自動ドア」

3.1 「ソーシャル・キャピタル社会関係資本ⁱⁱ」という「自動ドア」

筆者が車椅子使用を余儀なくされた期間の活動予定を殆ど変更しなくて済んだのは、何にも増してそれを可能にしてくれた人たちのお陰である。この人たちにはどんなに感謝しても感謝しきれない。

筆者がこのような人たちに恵まれたことについて考察する際に「ソーシャル・キャピタル」という概念が有用である。「ソーシャル・キャピタル」とは「人びとの強い信頼関係、互酬と呼ばれる相互扶助の慣行、密度の高い人的ネットワークといった、人びとの協力

関係を促進し、社会を円滑・効率的に機能させる諸要素の集合体を資本（キャピタル）に見立てた概念」（山内、2010、p.10）であり、「信頼や互酬の関係、ソーシャル・ネットワーク（中略）などの社会関係の特徴を、コミュニティに蓄積し、個人が利用できる資本とみなした概念」（芳賀・高野・坂本、2015、p.103）とも定義される。関根（2020）が「人間関係、すなわち社会的ネットワークは、ソーシャル・キャピタルを構成する主要な要素の一つ」（p.3）であると述べていることから、周りの人たちという存在をソーシャル・キャピタルとしてとらえて考察することは妥当であろう。

今回多くの支援をしてくれた人たちは、筆者との関係性から1. 趣味のサークルの友人たち、2. 筆者が以前指導した修了生、3. 仕事上の協働者、という3つのグループに分けて考察する。第1グループの友人たちとは私的な対人関係のもとにあり、筆者とは対等な関係にある人たちであった。今回の件より前から共に活動していた仲間であると共に、筆者が住んでいるところに比較的近いところに住んでおり、車という移動手段を何度も提供してくれた他、生活上の様々な面で支援を行ってくれた。一方第2グループの修了生は、今回の一件以前から長期に亘って筆者と同じ学会に所属して活動しているのみならず、筆者が私的に開催している勉強会の支援のために筆者が研究補助員として雇用している人でもある。一方、以前一緒に旅行に行ったこともある間柄であり、公的な対人関係と捉えるか私的な対人関係と捉えるかは若干微妙なところがあった。長年の付き合いからお互いに気心の知れた仲であると筆者は思っていたが、以前は筆者が指導する立場にあったという点から、もしかしたら当人は筆者の依頼を断りにくいと感じていた面があったかもしれない。他方第3グループの協働者たちは筆者と対等な立場、若しくは筆者より上の立場の人たちである。筆者が車椅子使用者となっていた期間にあった会議の殆どがオンライン上での開催だったため、会議などの出席に関しては、骨折していなかったと仮定した場合に筆者が行うことができたと考えられる仕事と、実際に行うことができた仕事との間に大幅な乖離があったとは認識していないが、勿論筆者が気付かなかったところで様々にフォローして頂いていたであろうことは想像に難くない。尤も、これは他の2グループの人たちについてもいえることである。

この3つのグループの人たちに共通している点は、

ⁱⁱ 佐藤（2003）は「ソーシャル・キャピタル」の和訳として「社会資本」「社会関係資本」「社会的資本」「関係資本」「人間関係資本」「ソーシャル・キャピタル」など様々なものがあることを指摘したうえで、原語の Social Capital をそのまま「ソーシャル・キャピタル」と表記しているため、ここでは「社会関係資本」と「ソーシャル・キャピタル」とは同じ概念を指すものとして扱う。但し、「ソーシャル・キャピタル」という語自体の意味が一義的に確定しているとは言い難い。佐藤（2003）は「ソーシャル・キャピタルを唱える論者の間でもその内容をどう理解するかについては完全に一致しているわけではない」（p.23）とし、ハニファンの「個人ないし集団相互の善意・友情・共感・社交」という定義、ラウリーの「家族や人種・エスニシティ、宗教地域など人的資本の背景をなす社会的条件」という定義、コールマンの「共通の地域・家庭・学校・宗教・職業などを背景にアクターの行為を促し目標を達成するための生産的な関係性」という定義、バットナムの「信頼・規範・ネットワーク」という定義、そしてブルデューの「社会的な義務ないし連係」という定義を紹介して「その具体例や表現はさまざまである」（p.23）と述べている。更に「これらの要因が人間社会のありかたに大きな影響を与えていることは誰も否定しないだろう。だが、なぜソーシャル・キャピタル、資本と呼ぶ必要があるのか。」（p.23）という疑問も呈している。

誰も筆者を支援する義務は負っていないという点である。筆者の依頼に応じて、又は依頼がなくても自主的に、筆者を支援してくれた人たちであった。一方この3つのグループの人たちの間の大きな違いは筆者を支援することによって生じる自身への利益の有無だったといえる。骨折した日の10日後に予定されていた趣味の集まりの発表会で、筆者は参加が必須となる一翼を担っていたため、いわば筆者を必要とする度合いはこの第1グループが最も高かったといえる。共に行っている活動に於いて筆者が欠けることは自分たちの不利益にもなることだった。一方第2グループの修了生は本人の活動の中では筆者を必要とすることはない立場だった。当人の生活環境で泊り掛けの外出が可能だったことから、今回新幹線に乗って行く必要があった面接授業と学会にはいずれも同行してもらったが、前者は本来行く必要がなかったところに筆者の依頼に応じて行くことになったのであり（後者はもともと本人も行く予定にしていたものであったのは筆者にとっては幸運だった）、本人の活動に於いて筆者が欠けても影響は受けなかったはずである。筆者を支援することによって生じる自己への利益は最も少なかったのみならず、筆者を支援することによって自身のスケジュールを大幅に変更しなければならなかったという意味でむしろ不利益を被った面さえあったはずである。他方第3グループの協働者たちにとっては、自分たちの活動に於いて筆者が欠けた場合はスケジュール変更の必要性など若干の不利益が生じるはずであった。対応が不可能な変更ではなかったはずだが、第1グループの友人たちが受けた可能性があった不利益と比べればかなり少なく、むしろ筆者を支援する時間を割くことによる不利益が生じた可能性がある。

仮に筆者がこの社会関係資本を有していなかったらどうなっていたかを考えてみたい。第1グループの社会関係資本を有していなかった場合は、それまで大きな熱意と時間をかけて取り組んでいた趣味の活動が継続できなくなっていたであろうし、毎日の生活でも不自由していたであろうことは想像に難くない。第2グループや第3グループの社会関係資本を有していなかった場合、予定していた授業や学会参加、更には学内業務などが行えず、教員や研究者としての本分であるべき活動を行うことができなかったはずである。即ち、社会関係資本を有しているということ自体が特権を有していることに繋がっているのである。

それでは筆者がこれらの社会関係資本を有するに至ったのはどのような経緯によってだったのか。第2グループと第3グループの社会関係資本を有していること背景には、放送大学の教員であるという事実が厳然として存在している。放送大学の教員であるからこそ、第3グループの協働者と対人関係を構築することが可能だったし、第2グループの修了生が学生だった時に指導することができたのである。更に筆者が放送大学の教員でいられるようになった経緯を考えると、どのような学歴を積むことができていたかに依る

ところが大きいことに気付く。これは正に出口(2020; 2021)が特権の例として挙げていた事柄そのままである。

加えて、趣味の活動を続ける経済的余裕と時間的余裕がなければ第1グループの社会関係資本を有するに至らなかったであろうことを考えると、やはり放送大学の教員であるということが不可欠な要素として関わっていることに気付く。私的な活動を通して得た友人であっても、社会的な特権と無縁ではないことを示しているといえる。

3.2 「経済資本」という「自動ドア」

「経済資本」とは「自由にできる資源（金銭・資産・財産）のこと」（リベラルアーツガイド、2021）だが、一時的な車椅子使用者となった筆者が活動予定を変更せずに済んだもう一つの理由は、予定の変更を回避できるだけの経済資本、即ち金銭的余裕があったからである。日本では公共交通機関での支援を要請する場合（電車の乗降時の支援など）は支援要請者に経済的な負担はかからないが、移動手段としてタクシーを使う場合は当然タクシー代という経済的負担が掛かる。筆者の場合はこの出費を厭わずに済むだけの安定した収入があった。骨折後は自宅から徒歩5分程度のところにある整形外科で受診したが、初回受診時からタクシーを呼んで通院した（歩けなかったので致し方なかったが）。その後も非常勤先に行くために何度もタクシーを利用したし、放送大学に出勤する際にも駅からタクシーを利用した。

また、車椅子をレンタルすることができたことも、筆者の可動性を大幅に向上させた。松葉杖は整形外科から無償で貸与されていたが、使用開始後数日で肩を痛めてしまったため、車椅子を借りることにしたのだった。それ以降外出時には主に車椅子を使っていたが、この車椅子がなければ新幹線を使った移動などは到底無理であり、もっと多くの予定変更を余儀なくされたのは間違いない。

金銭的な余裕があるということは明白な特権である。筆者の収入の主要な部分は放送大学から支給される給与が占める。従ってこの金銭的余裕という特権も勿論放送大学の教員であるという点に由来することは言を俟たない。

一方、松葉杖は基本的に自分で操作するものだが、車椅子は支援者に押してもらい機会も多かったし、後に述べる電車の乗降に際してより多くの時間や装置が必要だった。その意味では松葉杖に比べて車椅子の方が他人の支援を多く必要としたことは紛れもない事実である。それでも筆者が車椅子を使うことができたのは、もう一つの資源を有していたからだった。

3.3 「人的資本」という「自動ドア」

野村総合研究所 (n.d.)ⁱⁱⁱは「人的資本」について「人的資本の定義は、国際機関、各国の会計基準・情報開示基準関連団体、研究者等が様々なものを提示する発展途上の状況であり、定まったものではありません」としながらも「企業の構成員としての個人が持つ資質(倫理観、協調性、リーダーシップなど)や能力(知識、技術・技能など)を、企業の付加価値を生み出す資本とみなしたものと定義している。ここでは前段の「個人が持つ資質(倫理観、協調性、リーダーシップなど)」という側面から考えてみたい。

筆者が有していた社会関係資本のお陰で、車椅子使用者になる前に立てた予定を変更しないという、必ずしも当たり前ではなかったことが実現できたことは先に述べた。が、厳密に言えば、このような社会関係資本を単に有しているだけでは「宝の持ち腐れ」となってしまう、予定変更を行わずに済むことは保証されないだろう。つまり、これらの社会関係資本を活用する術を持っていること、即ち援助を求める働きかけができるということが必要であると考えられる。宮本(2015)は「健康上の問題を抱えている個人が、問題解決に向けた支援を受け入れ活用する力」を「受援力」と定義している(p.81)が、まさにこの概念が該当する。宮本(2015)は「援助関係」を「『援助が成立している人間関係』、あるいは『援助を成り立たせる人間関係』」(p.83)であるとしており、個人が持っている人的資本である「受援力」によって社会関係資本を「援助関係」にする必要があるといえよう。筆者が人的資質としてこの「受援力」を有していたからこそ、他人の支援の下で車椅子使用者となることが可能だったのであり、その結果として予定の変更を行わずに済んだのであった。同時に、筆者が「受援力」を活用することができたのは、周りの人たちに対して援助を求めることに対して大きな抵抗を感じないという筆者の性格によるところもあったことは見逃せない。

人的資本という枠組みの中でもう1点考えておきたいのは、筆者が車椅子使用者だった期間中、支援者が一緒にいる際に、第三者が筆者自身に関する内容の事柄を伝達する場面(例えば電車の降車駅ではそちらの駅の係員が対応することを説明するような場合)、筆者に対してではなく支援者に対してその内容を話す場面が幾度かあったということである。栗田(2018)は「実際に多くの車椅子利用者が、病院や駅、役所などの応対で、自分ではなく介助者や付き添っている人に話をされると子ども扱いされた経験をもつ」(p.159/357)と述べている。自分に関することを自分に向かって話してもらうということは余りにも当然のことであり、それさえもが特権であるということは、今回の件がなければ決して気付かなかったことだったに違いない。

4. 見えた「自動ドア」としての「社会資本」

佐藤(2003)によれば「社会資本(Social Overhead Capital)はこれまで、社会的インフラストラクチャーなど主に公的機関によって提供され人々の経済活動に間接的に貢献する資本を意味する言葉として理解」(p.1)されてきたものであり、広辞苑第6版(2008)では「道路・港湾・鉄道・通信・電力・水道などの公共諸施設のこと」と定義されている。社会資本として通常想定されるのは鉄道の設置や維持かもしれないが、本稿では要支援者に対する鉄道会社側の対応を社会資本と捉えて論じる。

筆者が車椅子に乗ったまま鉄道を利用する場合の手続きは、JR・私鉄・地下鉄共に概ね次のようなものであった。1)乗車したい電車の到着時刻の10分~15分程度前に駅の有人改札口に出向き、どこまで行きたいかを告げる。2)告げられた駅係員は目的地の駅に連絡し、対応可能な係員が居ることを確認した上で、当該電車に乗降用のスロープを設置し、必要に応じて車椅子使用者が乗車するのを援助する。3)車椅子使用者が降車する駅に電車が到着すると、そちらの駅係員が乗降用スロープを設置し、必要に応じて要支援者が下車するのを援助する。4)事前の要請があったり更に必要だと感じられたりした場合には、車椅子使用者の駅構内の移動を援助する。

筆者は今回初めてこのシステムを活用したが、かなりうまくできているというのが偽らざる感想だった。事前の予約が不要であることや、複数の鉄道会社に関わる乗り換えの場合でも機能している場合もあったことに対して大いに感心した。また、目的地のホームに必ず係員がスロープを持って待っていたことにも感動した(どうやら降車駅の係員の対応が確認できないうちは電車に乗せないことになっているらしく、降車駅の駅員に連絡がつかないという理由で乗車する電車を遅らせなければならなかったこともあった)。逆にいうと、このシステムが整備される前は、車椅子使用者の移動はどんなにか大変だったことだろうか。

その一方で、このシステムを活用したからこそ見えてきた「自動ドア」も幾つかあった。一つは同じ路線内での乗り換え(各駅停車から急行へなど)が自由に行えることである。筆者の自宅の最寄り駅は各駅停車しか止まらないので、普段は途中の駅で急行や特急に乗り換えて目的地まで行くことが多い。ところが車椅子使用者の乗降には駅係員の対応が必要となるため、途中駅での乗り換えの支援を行うことは難しいようであった(尤も、これは筆者自身が途中駅で乗り換えたい旨を明示したことがなかったせいだったかもしれない)。今回は一つの路線で余り遠くまで行くことがなかったため、最初に乗った電車以降車駅まで行く形で大きな問題は生じなかったし、逆に降車駅に止まる電車で最初から乗る形で構わなかったが、このような

ⁱⁱⁱ この文献もウェブサイト上にあるため、引用箇所については引用元ページ記載不能。

乗車形態では途中で目的地を変更したくてもできないであろうことは明白だった。このことから、「自分が行きたい方法で行きたいところに行ける」という「自動ドア」は、はっきりと見えた。

もう一つ見えたのは「エレベーターの設置位置を事前に調べなくても移動できる」という「自動ドア」だった。普段筆者は駅のホームと改札口との往復にはエスカレーターか階段を使うことが多く、エレベーターの位置を確認してはいない。しかしながら、よく指摘される通り、エレベーターの設置数は多くないうえ、必ずしも乗り換えなどに便利な位置にあるとは限らない。そのせいで移動に予想以上の時間がかかってしまい、待ち合わせに遅刻してしまうという事態に何度か陥った（前述した遅刻の原因の一部もこの点にある）。とはいえ、エレベーター自体は存在してはいるのだから、これも事前に調べさえすれば陥ることのなかった事態であるといえ、車椅子使用初心者である筆者が十分な事前準備を行わなかったことを示す例となろう。

私たちは普段の生活の中で多くのことを当たり前と考えており、それらを当たり前であると考えていることを自覚さえしていない。駅に行って来た電車にすぐに乗れること、好きなところで乗り換えられえること、急に気が変わって目的地を変更することができること、そのいずれもが実は特権なのであったが、これらのことは正に当たり前であり過ぎて、それが「自動ドア」であることに全く気付いていなかった。先にも述べた通り、車椅子使用者に対する鉄道利用時の支援は当事者にとって重要な社会資本であり、このようなシステムが鉄道会社を跨ぐ形で整備されているのは素晴らしい社会資本であるといえる。一方、特権という観点から見れば、この社会資本を使わなくて済むこと自体が特権なのである。

5. まとめ

本稿では筆者が一時的に車椅子使用者になった経験に基づいて「社会関係資本」「経済資本」「人的資本」及び「社会資本」という観点から、車椅子使用者ではない時に筆者がもっている特権について考えてみた。車椅子を使うということ自体が、「社会関係資本」「経済資本」「人的資本」を併せ持つことができたからこそ可能だったことであり、車椅子を使って電車で移動することができたのは日本社会の中にそれを可能にする「社会資本」があったからだ。「経済資本」を有しているからこそ車椅子やタクシーをはじめとする出費を伴う対象を躊躇なく利用することができるのであり、これは最も分かり易い形の特権であった。更に、支援を行う義務がないにも拘わらず支援を申し出られる人たちがいること、そしてその人たちに対して援助を求めることができ、提供された援助を受け入れることができることは、いずれも筆者が有している特権であることが分かった。また、自分に関することを自分に向かって話してもらえるとということさえも誰も

にとって「当たり前」なのではなく、一部の者がもつ特権であるということに気付くことができた。加えて、要支援者のために整えられている社会資本は、それを使わなくて済むことこそが特権であることが確認できた。

骨折後2か月弱で筆者は車椅子使用者というマイノリティの立場をはずれ、骨折する以前の「健常者」というマジョリティの立場に戻った。日本社会の中で健常者という社会集団に属していることは社会の中でマジョリティの立場に位置することであり、その立場に位置するだけで多くの特権を享受しているのである。出口（2020）は次のように指摘する。

マジョリティ性を多くもつ人たちが、自らの特権に無自覚であることがなぜ問題なのか。一つは、「自分は特に優遇されていない」という認識のもとで暮らしているため、「自分は『ふつう』で、特別ではない」「私は差別なんかしていないし、何も悪くない」と思ってしまうことである。

それは、差別がある現状に対して「自分は変わる必要がない」と思っているのと同じである。差別に関してマジョリティ性を多くもつ集団の人たちが「自分は変わる必要がない」と考えているということは、裏を返せば、「マイノリティが変わればいい」と考えていることになる。

その上で「特権に気づくことで期待できるメリット」として「差別の問題をマジョリティ側が自分ごととして捉えられる」「特権があることによって、どれだけ社会を変えやすい立場にいるかが自覚できる」「アライとなることでマイノリティとマジョリティが共に生きやすい社会が実現できる」という3点を挙げている。

「マイノリティ」と「マジョリティ」は互いの関係性の中で作られるものであり、個人はマジョリティ／マイノリティのどちらか片方に属するものではなく常にマジョリティ性とマイノリティ性を併せ持っている存在である（河合、2010）。このことを考えるとき、マジョリティとして特権を享受している時には見えない「自動ドア」を、これからも注視していく努力は重要であろう。

引用文献

- 河合優子（2010）「マイノリティとマジョリティ」池田理知子編著『よくわかる異文化コミュニケーション』第X部第4章（pp.162-163）ミネルヴァ書房。
- 栗田季佳（2018）「障害」北村英哉・唐沢穰編著『偏見や差別はなぜ起こる？：心理メカニズムの解明と現象の分析』第8章（pp. 153-174）ちとせプレス。Kindle 版。

- 佐藤誠 (2003) 「社会資本とソーシャル・キャピタル」『立命館国際研究』16 (1)、1-30.
- 関根仁博 (2020) 「ソーシャル・キャピタルが主観的幸福感に及ぼす影響と人間関係」『KIER Discussion Paper (邦文版)』2002、1-14 <http://hdl.handle.net/2433/262377> (2024年10月24日参照).
- 出口真紀子 (2020) 「マジョリティの特権を可視化する：差別を自分ごととしてとらえるために」東京人権啓発企業連絡会ウェブサイト内『クローズアップ』掲載
https://www.jinken-net.com/close-up/20200701_1908.html (2024年10月24日参照).
- 出口真紀子 (2021) 「『特権』の概念：北米社会と白人特権の考察」坂本光代編『多様性を再考する：マジョリティに向けた多文化教育』第4章 (pp.73-89) 上智大学出版.
- 野村総合研究所 (n.d.) 「人的資本」野村総合研究所ウェブサイト内『ナレッジ・インサイト 用語解説 経営』
https://www.nri.com/jp/knowledge/glossary/1st/sa/human_capital (2024年10月25日参照).
- 芳賀道匡・高野慶輔・坂本真士 (2015) 「大学生活における主観的ソーシャル・キャピタルが、抑うつや主観的ウェルビーイングに与える影響：ネットワーク・サイズとの比較から」『ストレス科学研究』30、102-110.
- 宮本真巳 (2015) 「受援力に関連する諸問題について：災害支援からセルフケア支援まで」『日本保健医療行動科学会雑誌』30(1)、81-86.
- 山内直人 (2010) 「コミュニティにおけるソーシャル・キャピタルの役割」『環境情報科学』39(1)、10-15.
- リベラルアーツガイド (2021) 「文化資本とは」リベラルアーツガイドウェブサイト内『社会思想』
<https://liberal-arts-guide.com/cultural-capital/> (2024年10月24日参照).